



## 「改訂新版 気象予報のための 天気図のみかた」

下山紀夫 著

東京堂出版, 2013年6月  
208頁, 4,200円 (本体価格)  
ISBN 978-4-490-20832-0

1998年に刊行された「気象予報のための天気図のみかた」の改訂版。気象予報に必要な様々な種類の天気図をはじめ、気象衛星画像の利用や数値予報について、また気象予報の作業手順といった気象現場に即した内容に至るまで、丁寧に解説した本である。合間に書かれている8つのコラムも大変興味深い。著者は、予報官、天気相談所長、そして各地の気象台長を務められ、長年気象庁の現場で活躍された下山紀夫さん。退官後には日本気象協会にうつり、私が日本気象協会の職員時代に大変お世話になった、私にとっては偉大な先生である。そんな下山さんの著書の書評を書かせて頂くのは大変恐縮してしまうのだが…

本書の第一印象は、専門的な解説書にも関わらず、とにかく文章が平易で読みやすい。気象の専門書というと、専門的な言葉が並んでどうしても敷居が高いイメージがあるが、本書ではその敷居の高さをあまり感じない。もちろん説明のための難しい専門用語は出てくるが、それぞれの天気図のみかたなどについて丁寧に解説されている。

改訂版である本書の大きな特徴は、ナウキャスト3兄弟（降水、雷、竜巻発生確度の3つのナウキャスト）など、最近始まった情報についても触れられている点が挙げられる。さらに旧版にはなかった週間予報や長期予報に関する天気図の解説も加わって、長年気象予報や気象解説の現場に携わっている人にとっても、すぐに確認ができる気象のバイブルとして常に傍に置いておきたい一冊といえる。

もちろん文章が平易ということで、気象に関心があり、これから気象予報士の勉強をしたい、という人にもお薦め。専門的な天気図の解説書は他にあまりなく、「改訂新版 気象予報のための天気図のみかた」はとくに実技試験の勉強の“みかた”（味方）になると思う。

さて本書は基本的には気象予報技術の解説書なのだ

が、読み始めてまず目にとまったのは、「はじめに」の章で触れている「観天望気」（天を観て気象の変化を判断すること）という言葉。そして旧版にはなかった「気象観測は気象予報の第一歩」という章で本文がスタートしている点である。

例えば本書では、『大気の状態を理解するために、人間の五感で大気を「観察」し、機器を使って大気現象を測定する、気象観察+気象測定=「気象観測」が基本であり、(中略) 気象予報は観測が命である』と書かれている。これは私も大いに共感する部分である。

考えてみれば、旧版が刊行された15年前と今では、気象予報や気象解説を取り巻く環境は大きく変化した。15年前の1998年は、気象予報士制度がスタートしてから数年経ち、気象キャスターが各局で出演をはじめた頃である。奇しくも私をはじめ気象キャスターとして出演したのもこの年だったのだが、予報の密度や精度は今よりも粗く、情報の種類も限られ、テレビの解説などで使える画面の種類も少なかった。ところが今では地方局を含めて全国各地で気象キャスターが活躍する時代となり、気象庁ではドップラーレーダー設置など観測網の整備が進み、気象庁から発表される情報も「ナウキャスト」「竜巻注意情報」など多種多様となった。そして何とんでもインターネットやスマートフォンなどの普及で、いつでもどこでも知りたい気象予報が得られる時代となった。

その一方で、この15年間で気象庁にも効率化の波が押し寄せ、全国各地の測候所が廃止されるなど、人による“気象観察”の役割がどんどん小さくなってきている印象がある。「はじめに」や「おわりに」の章で書かれている著者の読者へのメッセージも、「観天望気など自然観察の一助として」人間力を高めてもらいたい、といった内容になっている。

長年気象現場で活躍された著者の、“観察の大切さ”の言葉は非常に重い。それぞれの天気図の読み方の習得や確認という技術的な部分だけではなく、気象業界に携わる心構えの部分も含め、傍らにおく気象のバイブルの1つとして本書をお薦めしたい。

(NPO 法人気象キャスターネットワーク  
田代大輔)